

二種深信と七深信の考察

蓬 茨 祖 運

(1) 浄土の宗義の原点

浄土教が仏教の傍系的なものとしての立場から、独立の宗義としての体系をととのえて来たのは唐の善導からである。彼の名著『観経四帖疏』の結びの言葉のはじめに「ひそかにおもんみれば真宗遇いがたし、浄土の要逢いがたし」と述べているのは、その意趣の発現といえるであろう。これはやがて親鸞が、同じく善導の著『法事讃』に「双樹林下往生、難思往生、難思議往生」とある名目とをあわせて、三願三機三往生の、いわゆる三々法門を形成する基点となつたのであつた。

この善導の、真宗宗義の原点ともいうべきものになっているのは何かといえば、大経の四十八願、特に彼が「称我名号下至十声」と意識した十八願であることはいうまでもないが、何故にこの本願を基点として真宗宗義をあらわそうとしたかといえ、仏教が末代の下機のための法、今日の言葉でいえば、一般民衆をして真実の安心立命を与えるものであつて、上機上根、いわゆるすぐれた智識人のものでないことを明かにするためであつた。そこに彼自身の安心立命より発動する、真剣で熱烈な利他教化の躍動があつたのである。

このような彼の意図がもつとも明瞭になっているのが、観経三心釈である。特にその深信釈は浄土の宗義の淵藪ともいえるものであつて、後の源空、親鸞の宗義はこれを基点として形成せられてきているといつてよい。ところが、その深信釈は古来主として「二種深信」のみが中心として考えられ、やがて、真宗宗義の一項として考えられるようになった。それはその簡明さと深刻さによつてであろうが、その為に、この二種深信の基本的な意義が見のがされるようになってしまった。仔細に彼の深信釈を調べてみると、単に真宗宗義上の一

論題でなく、全宗義の原点をなしていることを認めないわけにゆかないのである。そして、そこに善導の信念の堅固さと他を動かす熱烈さを、驚異をもって見つめずにおれないのである。

(2) 観經三心積

『観經四帖疏』は、善導が観無量寿經を解釈したもので、その内容は、玄義分第一、序分義第二、定善義第三、散善義第四の四部になっているので、四帖疏とよんでいる。

善導は唐初期の人、人生の意義を仏道に求め、はじめ、法華經、維摩經などに自らの安心を求めたが、自らを見ることに厳しかった彼は、やがて観經を得て浄土の業を修した。そうして、遙か西河に道綽をたずねて、専ら浄土に帰したという。時に観經は諸宗の硯学に愛読せられていたが、その解釈は高踏にして、凡夫往生の道を塞ぐことに気づき、仏教の本意濁惡世の衆生に眞の安心立命を与える道にあることをあらわそうとして、この四帖の疏をつくった。玄義分は、諸師の観經を解すること正しからざるを挙げてこれを破し、七科を挙げて観經を解する立場を明かにしている。序分義、定善義、散善義は、すなわち観經の文々句々についての釈でこれ程のこまかい釈は、観經に関する限り前後にその例を見ない。

今、二種深信は、その中の散善義の最初に設けられている三心積の第二であるが、この三心積というものはまた善導独自の解釈であって、その独自性のために、また理解することに極めて難渋なるものを含んでいる。しかし、その中を貫いている彼の信念は、その強烈さにおいてまたその例を見ないであろう。それは、諸伝の資料による善導の人となりを見るよりも、むしろ、この三心積の中に善導の如何なる人であるかがよくあらわれているといっても過言でないであろう。

そもそも、三心とは観經に「一者至誠心二者深心三者廻向発願心具三心者必生彼国」（一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心、三心を具すれば必ず彼の国に生ず）とあって、その字数僅かに二十四字にすぎない。しかるに、これを釈する善導の疏文は実に三千六百四十七字の多きに及んでいるのである。

このような長文の釈をこの僅かの経文に対して施したということは何故であるか、不思議というよりほかはないが、その内容からみて、彼自身の終世の求道の結果、浄土三経に到達して、そこに真実の安心を得た己証の表白であることは疑う余地がないのである。これは彼自身の安心の表白であるのみでなく、更にそこには大衆を呼び勧めはげます烈々とした彼自身の声があふれている。この声はやがて彼にとつて異国の人、源空、親鸞をよんで、印度、中国、日本の国境や人種をこえた世界をあらわしてきた。実に仏教が浄土の名をもつてよばれるにふさわしい内容とその歴史を開顕していったのである。

(3) 深 心 釈

その三心釈のうちで、特に浄土の宗義、すなわち、真宗の宗義を形成している中核をなすのは中間の深心釈である。無論、前後の二心、至誠心、廻向発願心は、深心と別々に存在するわけではなく、後に、親鸞によってその構造が緻密に考察されることになるのであるが、今はそれを省略して、深心釈そのものの考察にしばらくことにする。

善導は、経の「二者深心」とある文を釈して、「深心と言うは深信之心なり」と釈した。深心とは必ずしも深く信ずる心と限られない。それを善導が深く信ずる心と釈したのは観經の所被の機、直接には經の対告衆である韋提希を垢障の凡夫と定めたことによるといえるのである。浄影の觀經疏によれば、深心を「深心に信樂して慇至にして彼国に生ぜんと欲す」と釈しているが、この上品上生の機を大乘人中の第四地以上、第七地已来の菩薩としている。これによれば深心に上中下の深淺がおのずから考えられていることが知られるのである。善導は、こうした説を却けて、上三品は大乘の法に遇う凡夫、中三品は小乗の法に遇う凡夫、下三品は唯惡縁に遇う凡夫とし、浄影が第七地の菩薩とした韋提希を垢障の凡夫として、その垢障の凡夫が法報高妙の浄土に往生することを得るのは「仏願に托して以って強縁とす」るからであると、玄義分に明かにしているのである。したがって、深心を經全体の機、定散、九品の諸機に通ずる「深く信ずる心」としたのであろう。無論

定散諸機の各自の自力の心は自ら浅深があろう。しかしこの經に言う深心は、各機を通じて一貫する深信をあらわすものという意味である。「諸機の浅心に対するが故に深という」（化巻）と親鸞がいうのはこの旨であらう。

このように、善導が深心を深信と釈したのは、機の善惡にかかわらず、それは仏願を深信する心でなくてはならぬと限定したからである。

(4) 二種深信

善導は「深心と言うは深く信ずるの心なり」と釈して、次に「亦二種有り、一には自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し、常に流転して出離の縁有ること無しと深信す。二つには彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して疑い無く、慮り無く彼の願力に乗じて定めて往生を得と深信す」と述べている。是が後世機法二種深信と称せられるものである。是を二種深信と呼ぶようになったのは、源空の指示にもとづくものである。

源空は選択集三心章（第八章）に三心釈の全文を引用してから（この中、深心釈の第七深信の就行立信釈は二行章に引用）その私釈には、これを次のように二種にしぼっている。

「次に深心とは深信之心なり、当に知るべし、生死の家には疑を以て所止と為し、涅槃の都には信心を以て能入と為す。故に今二種の信心を建立して九品の往生を決定するものなり。」

源空は特に機の深信の重要性に注目して、和語灯録の往生大要鈔に次のように述べている。

「即ち二つの信心というは、始に我身は煩惱罪惡の凡夫なり、火宅を出でず、出離の縁無しと信ぜよと云う。次には決定往生すべき身なりと信じて一念も疑うべからず。人にも云妨げらるべからずなんぞといえる、前後の語相違して心難きに似たれども、心を止めて是を案するに、始には我身の程を信じ、後には仏の願を信ずる也。但し後の信心を決定せしめんが為に、始の信心を挙げるなり。その故は、若し始の我身を信ずる様を挙げずし

て直に後の仏の誓いばかりを信すべき旨を出したらましかば、諸の往生を願はん人、難行を修して本願を馮まざらんをば暫く置く。正しく弥陀の本願の念仏を修しながらも、猶ほ心に若し貪欲瞋恚の煩惱をも具し、身に自ら十惡破戒等の罪業をも犯す事あらば、猥に自身を怯弱して、返って本願を疑惑しなまし。誠に、此弥陀の本願に、十声一声に至るまで往生すと云事は小縁おほろびの人にてはあらじ。妄念をも起さず、罪をも造らぬ人の、甚深の悟を發し、強盛の心もちて申したる念仏にてぞ有らん。我等如きのえせ者共の、一念十声にては、よもあらじとこそ覚えんも惡からぬ事なり。是は善導和尚の、未來の衆生の疑いを起さん事を顧みて、此の二種の信心を挙げて、我等如き煩惱をも断ぜず罪惡をも造れる凡夫なりとも、深く弥陀の本願を信じて念仏すれば、十声一声に至るまで決定して往生する旨を釈し給えるなり。かくだに釈し玉はざらましかば、我等が往生は不定にてぞ覚えまし。危うく覺ゆるに付ても、此釈の殊に心にそみて覚え侍る也、されば此の義を心得分ぬ人にこそ有んずれ。仏の本願をば疑はねども、我心のわろければ往生は叶はじと申合いたるが體やがて本願を疑うに侍るなり……中略……すべて我心の善惡を計て仏の願に叶い叶はざるを心得合せん事は仏智ならでは叶うまじき事なり。」

まことに、選択集に「今二種の信心を建して九品の往生を決定するものなり」と簡潔に云い切つてある内容が事こまかに説明せられている。

このような善導の二種深信は、特に源空の廻心に大きな力を与えているのであるが、先に述べたように、深心と言うは深く信ずるの心と限定した基礎は、觀經所被の機が「垢障の凡夫」すなわち現に罪惡生死の凡夫であるということである。そして特に「曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁有ること無し」と言葉をそえているのは法報高妙の浄土に往生することが出来るのは全く仏願力に由るのであって、凡夫の力がいささかも雜るものでないことを示す為である。

したがって、この機の深信が無いと、純粹に仏願力をもって往生するということが成り立たないのである。仏願力をもつての往生が無いと機の深信もまた成り立たないのである。その結果、曠劫に一たびというこの人生を、解行不同の邪雜人の惡智識に翻弄せられて空しく亡滅してしまふより外にないことを示しているのだ。

る。問題をここに於いての深心積であることを銘記しておかねばならないのが、この善導の積である。

ところで、第二深信の内容が所積の觀經の定散二善でなく、大經の四十八願となっているのは何故かというに、ここに、善導の仏教史觀というものがあるからである。善導は玄義分において、觀經の宗について、「觀仏三昧を以て宗と為し、亦念仏三昧を以て宗と為す」と二宗を立て、その体を「一心に廻願して淨土に往生するを体と為す」といつている。つまり經に二宗を開くのは、後に觀仏三昧を廢して念仏三昧を立てる為であるが、ここに聖道門仏教を廢して淨土門仏教を立てる觀經独自の役目というものを見ているのである。

そして、念仏三昧の一宗を開き、往生淨土の教相を立て、その教相の根源を大經の四十八願に置いたのである。ここに、宗旨の体を「一心に廻向して淨土に往生する教」と定めた所以がある。これによって垢障の凡夫が煩惱を斷ぜずして涅槃を得る道を開顯せられたのである。この法の深信が根底となつて機の深信が立てられるのである。

(5) 第三深信

ところが、このあと、善導は更に五条の深信積を開いて、淨土三經ならびに淨土往生の行について正雜二行を分別しているのである。

従来、この第三深信より第七深信にいたるまでを、第二の法の深信より展開されたものであるから、結局は第二深信におさまるものと解釈されている。しかし何が為にこの五深信が展開されねばならなかったかについては、私には充分にその意味がわからなかった。いろいろと考えあぐねているうちに、この五深信は何れも機の深信を立てる為であり、機の深信を立てるとは、真宗についての眞實信心を立てる為ではなかったかと気づいたのである。そうみてくると、親鸞の三々法門が実にこの深信積より展開してきていることに気づくのである。そういう観点にたつて、以下、五深信の内容についてふれてみたいと思う。

先ず第三深信とは次の文である。

「又決定して釈迦仏、此の觀經の三福九品定散二善を説いて彼の仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕せしむと深信す」

これは所釈の觀經について、その説法の内容が諸師と相違することを示すと共に「彼の仏の依正二報を証讃して、人即ち凡夫人をして欣慕せしめ」るものであると述べているのである。それは玄義に述べてあるように、諸師は九品をそれぞれ聖者にあてはめて解するに對し、善導は「九品唯凡」として凡夫人に阿弥陀仏の報土往生をすすめられたのが觀經であると証明しているのである。そのことを第三に挙げて、聖道門の立場を捨てて、觀經の本領たる淨土往生の教に歸すべきことを明すのである。この第三深信に第一深信を對比してみると、このことがはつきりと浮び出てくる。第一深信は第二深信にだけ属しているのではない。第三深信に第一深信をあてがってみれば、定散二善は所廢の行として説かれ、念仏三昧が所立の法としてすすめられている經意が明かになる。もし、機の深信なくば、衆生の自力心をもってする欣慕淨土の善根を説かれたのが觀經であるということになるであろう。親鸞はこの意味で信卷には深信釈の文の殆んどを引用せられ乍ら、化卷の觀經要門下にこの第三深信の文を引用せられている。いわゆる觀經における顯の義を示されているのである。

(6) 第四深信

次に第四深信の文は次の如くである。

「又決定して弥陀經の中に十方恒沙の諸仏、一切凡夫を証勸して、決定して生を得ると深信す」

ここに弥陀經を挙げるのは、第二深信が大經、第三が觀經につづいて第四に弥陀經を引いて、淨土正依の三經を示されるのであらう。後の第七深信に五正行をあげる中の第一の誦誦正行に「觀經弥陀經無量壽經等」と示されるものになるものであらう。そして、特に弥陀經によつて十方恒沙の諸仏が挙げられるのは、第二深信の弥陀、第三深信の釈迦、すなわち三仏をあげて、菩薩等の因人の説に依らないことを示されるのであらう。この第四深信に第一深信をあてがってみると、全く二種深信の外にないことになる。十方諸仏の稱揚讃歎は

十七願にもとづき、その所讃の名号の義は十八願以外にないからである。しかし、機の深信を離すならば、弥陀經中唯一の行、いわゆる、多善根多福德と称される名号を、己れの善根と執して往生を願う心となるであらう。親鸞はこの意味を酌んで、この第四深信の文を、化巻真門釈下に引用されている。

まさに三經に、要門、真門、弘願門の三門を分別する基礎は第一深信にあるということが明かとなってくるのである。

(7) 第五深信

以上、三經に通じて深信の教相を明かにしたが、次の第五深信にいたって、深信そのものの内容について、明確にされている。

「又、深信とは、仰ぎ願はくば、一切の行者等、一心に唯だ仏語を信じて、身命を顧みず、決定して行に依り、仏の捨てしめたもうものは即ち捨て、仏の行ぜしめたもうものは即ち行ず。仏の去らしめたまうものは即ち去る。是を仏教に随順し仏意に随順すと名く。是を仏願に随順すと名く。是を真の仏弟子と名く。」

まず、深信とは一心に仏語を信じて身命をかえりみずして決定して行によれと示されている。これは玄義分の第四に「説人の差別を弁ず」とある所に、諸經の起説五種に過ぎず。一には仏説、二に聖弟子の説、三に天仙の説、四に鬼神の説、五に変化の説、と示し、今此の觀經は仏の自説であるとあるによったもので、弟子である菩薩の論に依らず、仏説である淨土三經によつて、一心に仏語を信じて、身の命の長短をかえりみず、決定して往生淨土の行に依れといわれるのである。菩薩の道を精進するには長命でなければならぬ、しかるに、命終眼前に迫りつつある凡夫は身命をかえりみず一心に仏語を信じてひとえに念仏の一行に依つて決定深信すべきであると示されるのであらう。

されば、この深信も、第一深信の上に立つて設けられているといえる。しかもそこに弥陀釈迦諸仏の三仏の正意があるというのである。

これによれば、仏の捨てしめたまうものとは聖道の行である諸善であり、行ぜしめたまう行とは往生浄土の正行である念仏である。去らしめたまうところとは聖道の修行の場である穢土であり、去るをゆくとよむならば、ゆかしめたまうところは唯浄土である。これを仏教に随順し仏意、すなわち仏出世の正意に随順すと名づけるというのである。そうでなければ、凡夫人には遂に仏の出世がなかったことになり、それは仏を撥無することと異ならないことになる。

されば是を仏願に随順すると名づけ、すなわち真の仏弟子と名づけるとむすんである。ここに大經の十八願の「唯除」の文の意味が適確に示されているといえよう。

本願に随順するを真の仏弟子というとなれば、定散諸善にとどこおるのが仮の仏弟子、凡夫人の往生を否定するのは、すなわち、たとい聖道の学人であっても偽の仏弟子、すなわち、六十二見九十五種の邪道とせられた。親鸞の信巻における「真の仏弟子釈」は、この第五深信に内含されていることが了解せられるのである。以上は機の深信をあてがってみてはつきりするので、文面だけでみるならば、そうした微意はうかがうすきもないのである。

(8) 第六深信

されば、次に善導は、菩薩等の不相応教によって往生浄土の仏教を疑碍すべきでない、その意味で一切の行者が此の觀經によつて行を深信する者は必ず他の衆生を誤らないであらうとのべて第六深信を立てている。

「又、一切の行者、但能く此の經によつて行を深信する者は必ず衆生を誤らざる也。何を以つての故に、仏は是満足大悲の人なるが故に、実語したまう故に、仏を除いて已還は智行未だ滿たず、其の学地に在つて正習の二障未だ除かず。果願未だ滿たざるに由つて、此等の凡聖、たとい諸仏の教意を測量すれども、未だ決する能わず。平章ありといえども、要す須からく仏証を請うて定と為すべし。もし仏意に称いぬれば即ち印可して、如是如是と言ふ、若し仏意にかなわざれば即ち汝等の所説是の義不如是と言ふ。印せざる者は即ち、無記無

利無益の語に同じ。仏の印可したまう者は、即ち仏の正教に随順す。若し仏の所有の言説は、即ち是れ正教正義正行正解正業正智なり、若しくは多、若しくは少、衆すべて菩薩人等を問わず、其の是非を定むるなり。若し仏の所説は、即ち是れ了教なり。菩薩の説は尽く不了教と名くるなり、応まさに知るべし。是の故に今の時、仰いで一切有縁の往生人等に勸む。唯仏語を深信して專注奉行せよ、菩薩等の不相応の教を信用して以つて疑礙を爲して惑を抱いて自ら迷い往生の大益を廢失すべからず」

以上が第六深信の文である。

まず、一切の行者は、この觀經によつて、その往生の行を深信するならば、自ら誤らないのみならず他の衆生をも誤らないであらうと述べている。何故なら、仏は是れ満足大悲の人であるからというのである。これは諸師が、菩薩の論をもとにして仏説であるこの觀經を解釈したために、自らも生死を出る道を誤ったばかりでなく、他の衆生をも道を誤らしめた（玄義分の所論）ということに対して述べられたものである。

第一に、所被の機について、諸師は九品の機を菩薩十地のうちの第七地以下とし、特に韋提希を第七地の菩薩とした。そして、釈尊の示現せられた光台現国の中に阿弥陀仏を見て、無生法忍を得て、第八地に入った。よつて、五百の侍女の爲に仏の説法を請うた。それが觀經の正宗分であるとしている。

善導はすでに述べたように、韋提希を垢障の凡夫として、したがつて觀經の機を凡夫とし、その凡夫をして報土に往生せしめる法を説かれたものとするのである。

諸師の説ならば、凡夫は望みを断ち、諸師自らも、未だ初地にも達しない凡夫であるから、自らも利益を失うであらう。自他ともに誤らしめられるより外はないが、この觀經によつて、自身の機を深信して、法即ち往生淨土の行を信ずるならば、自らはもとより他の衆生をも誤らしめることなく、往生の大益を得しめるであらうと述べているのである。

特にこの章で善導が述べていることは、仏説と菩薩の論との区別である。これについては玄義分にいろいろと説明されているが、そのうちで、別時意と二乗種不生の二科がこの問題にかかわっているように思う。別時

意説は、下下品の十声称仏によつて往生を得るとあるのは、直ちに往生を得るのではなくて、別時、すなわち、唯未來の末に成仏を得る結縁となるばかりである。それを往生を直ちに得るように説かれたのは、懈怠の衆生をばげまして念仏せしめんための方便であると説いた撰論宗の学派からの難である。善導はこれを菩薩の論によつて仏説を論ずるものと破しているのである。二乗種不生は淨土論の語であるが、二乗種の往生ということにちなんで、善導は五乗齊入といつて、菩薩や声聞、縁覺や入天の五乗が共に仏願に托して報土に往生するということを聞いているのである。すなわち、菩薩も凡夫も同一の眞實報土のさとりに入ることが出来るのは仏願力によるのであつて、菩薩といえども自力をもつてしては弥陀の報土に往生出来ないことを述べているのである。

こういう意味で、上地の菩薩といえども仏の印可が無く、つまり仏証を得なければ眞に法を了解したといえない、したがつて仏の印可したもうものは、仏の正教に随順するものである。だから仏の所有の言説こそ正教、正義、正行、正解、正業、正智であり、多くをも、少くをも、菩薩人等を問はず、その是非を定めたもうものである。しかれば、仏の所説こそ一切を完全に了解したもう教であり、菩薩等の説は尽く不了教と名づくるのである。だから一切有縁の往生人等にすすめて、仏語を深信して專注奉行することをすすめるのである。菩薩の不相応教を信用して自身を忘れ、この仏語を疑悔して往生の大益を失わないようにと勸誡されているのである。

是を要するに、觀經には聖道門の教学からの解釈が多いのであるが、それは他面において觀經が聖道より淨土への要門としての意義をもっているからであらう。それが諸師の解釈では逆になつて、かえつて淨土門の道がとぎされることになるからである。一切罪障の凡夫が仏教の門から閉鎖されてしまうことは、全く大悲を失つた所行である。そこに「仏は是れ満足大悲の人」といわれる所以があるのであらう。ここにも、第一深信がもとになつて、仏説と菩薩の論とが明分せられ、觀經の要門としての面目があらわになることが知られる。

(9) 第七深信

こうして、次にあげる第七深信の文をみると、まず「又深心は深信なりというは、決定して自心を建立して教に順じて修行し永く疑錯を除いて一切の別解・別行・異学・異見・異執の為に退失傾動せられざるなり」といわれている。

はじめに「深心は深信なりというのは」とあるのは、経文に深心とあるのを、善導がはじめに「深心とは深信之心なり」と釈した意味を述べるのである。つまり第七深信は、観經の深心を善導が何故深信の心だと言ったかということである。深心かならずしも深信とは限らない。それを深信と限ったのは、決定して自心を建立して、この観經の教にしたがって修行し、永く疑や錯りを除いて、一切の別解・別行の人や異学・異見・異執の人の為に、退失せしめられたり、ひっくりかえされたりしないためである、というのである。ここに「自心を建立して」とある自心とは「永く疑錯を除いて」とあるから、自身の信心のことであって、その体が最初にとかれた二種深信である。しかし、これを建立することとはどうするか。ところが、親鸞は、この文を後に引く就行立信の中の五正行の文とを、観經要門のもとに引用されているのである。この意味は、観經当面の文においては、深心とは、自力の信心を建立して聖道諸師の妨難にさまたげられず、凡夫人が一心に五正行等の浄土の正行をもって、往生を得ることを決定せよという意味と示されるのであろう。しかし、機の深信をあてがってみるなれば、自力を建立せよとは、定散諸機の自力の信心をひるがえして、利他の信心に通入せよという意味になるのである。

五正行は、開門の五正行と合門の正雜二行とにわかれるが、そのうちの開門の五正行が引用せられている。正しく五正行を通じて「一心」の語があげられているが、自力の一心をはげましてすすめられているのである。

もし、この一心を機の深信にあてはめるならば、第四の称名を正定業とする「順彼仏願故」は、すなわち法の深信に外ならぬものとなるであらう。

さてこのようなわけで、第七深信の文は甚だながく、その内容も極めて緻密であるので、煩をいとわず、その全文をあげてみよう。

「問うて曰く、凡夫智浅く惑障する処深し。若し解行不同的人多く経論を引いて、相妨難し証して、一切の罪障の凡夫往生を得ずといわんに、いかんが彼の難を対治して信心を成就し、決定して直ちに進んで怯退を生ぜざらんや。答えて曰く、若し人有つて多く経論を引いて証して往生を得ずといわば、行者即ち報えて云え。なんじ経論をもつて来り証して生ぜずというとも雖も我意の如きは決定して汝が破を受けず。何をもつての故に、然るに我亦是れ彼の経論を信ぜざるにはあらず、尽く皆仰いで信ず。然るに仏彼の経を説きたまう時、処別・時別・対機別・利益別なり。又彼の経を説きたまいし時は、即ち観経弥陀経等を説きたまう時にあらず。然るに仏教を説きたまふこと機に備う。時亦同じからず、彼は即ち通じて人天菩薩の解行を説く。今観経の定散二善を説きたまふことは、唯韋提及び仏の滅後の五濁五苦等の一切凡夫の為に証して生を得と^{のたま}う。此の因縁の為に、我今一心に此の仏教に依り決定して奉行す。たとい汝等百千万億生ぜずといわば、唯我往生の信心を増長し成就せん。」

この第七深信は大別二段に分れていて、はじめの一段は「人に就いて信を立つ」と名づけられて、四重の破人に対する立信の相を述べ、等二段は「行に就いて信を立つ」と名づけて、淨土往生の正行と難行とを明かにして正行に帰する相を明示せられている。

上に引いた文は、そのうち第一段「人に就いて信を立つ」中の第一重であつて、凡夫の疑難に対する文である。聖道の諸師即ち解行不同的人が他の経論をもつて観経の往生の教を信じてても往生を得ずと難じてきたとき、彼の経と此の経とはまず説処・説時・対機やうける利益が別であると説き、今観経は韋提及び仏滅後の衆生の五濁五苦八苦の苦に悩む一切凡夫の為に往生を得と説かれたもので彼の経が人天菩薩等の学び行ずる為に説かれたのと全く相違する。このために一心にこの仏教によって決定して奉行するので、汝等百千万億來つてきまなければきまたげるほど、かえつてわが往生の信心を増長し、いよいよわが信心のまことなることを証明

するだけであると、答えている。難破によってかえって信心を堅固ならしめるという論理は第一の深信にもとづくからであらう。

一つく三重の破人のうち第二重は地前（十地以前）の菩薩・羅漢・辟支仏（縁覚）の難、第三重は初地以上の菩薩の難、第四重は報仏化仏の難である。これらの聖者及至報仏化仏が来って妨難することはあり得ないけれども、仮りに来って往生を否定するとも猶信心を増長することを述べる善導の文章はすさまじい勢いに満ちている。

「又、行者更に向って説いて言へ。なんじ善く聴け。我今汝の為に更に更に決定の信相を説かん。たとい地前の菩薩・羅漢・辟支仏等若しくは一若しくは多、乃至、十方に遍満して皆経論を引いて証して生を得ずと言はば我亦未だ一念の疑心を起さず、唯我が清浄の信心を増長し成就せん。何を以っての故に、仏語は決定成就の了義なるに由って、一切の為に破壊せられざるが故に。又行者善く聴け、たとい、初地已上十地已来、若しくは一若しくは多、乃至十方に遍満して、異口同音に皆、釈迦仏、弥陀を指讃し、三界六道を毀訾し、衆生を勸励して専心に念仏し、及び余善を修して、此の一身を畢えて後、必定して彼の国に生るとのたまふことは、此れ必ず虚妄なり、依信すべからずと。我此等の所説を聞くと雖も亦一念の疑心を生ぜず、唯我が決定の上上の信心を増長し成就せん。何を以っての故に、乃し仏語は真実決了の義に由るが故に、仏は是れ実知実解実見実証なり。是れ疑惑心の中の語に非ざるが故に、又一切の菩薩の異見異解の為に破壊せられず。若し実に是れ菩薩ならばすべて仏教に違ぜざるなり。」

第二重の地前の菩薩の難破に対しては、仏語は決定成就の了義の語であるから、不了義の一切の菩薩等の為に破壊せられないと示し、第三重の地上の菩薩の難破には、仏語は真実決了の義によることは前の難破と同じであるが、更に仏は実知・実解・実見・実証そのものであり、又菩薩は十地の菩薩といえども疑惑心中の人であるが、仏語は疑惑心中のものでないから、一切の菩薩の異見異解の為に破壊されない。そして真実の菩薩ならば、すべて仏教に違背することはないのであると述べている。

次に第四重の積をみてみよう。

「又此の事を置く、行者当に知るべし。たとい、化仏報仏若しくは一若しくは多、乃至十方に遍満して各々光を輝かし舌を吐き、遍ねく十方を覆い一一説いて言く、釈迦の所説、相讃めて一切凡夫を勧発して専心に念仏し及び余善を修して廻願して彼の浄土に生ずるを得るといふは此れは是れ虚妄なり、定めて此の事無しと。我此等の諸仏の所説を聞くと雖も、畢竟じて一念疑退の心を起こし、彼の仏国に生ずることを得ざるを恐れず。何を以つての故に、一仏は一切仏なり、所有の知見・解行・証悟・果位・大悲等同にして、少しの差別無し。是の故に一仏の所制は一切の仏同じく制したまう。前仏の、殺生十惡等の罪を制断したまうがごとく、畢竟じて犯さず行ぜざるを、即ち十善十行と名く。六度の義に随順す。若し後仏ましまして世に出でて、豈前の十善を改めて十惡を行ぜしめべけんや。此の道理をもつて推驗するに、明かに知りぬ、諸仏の言行相違失したまわず。たとい釈迦一切の凡夫を指し勧めて、此の一身をつくして専念し専修すれば命を捨てて已後、定めて彼の国に生るとのたまうは、即ち十方の諸仏悉く皆同じく讃じ同じく勧め同じく証したまう。何を以つての故に、同体の大悲の故に。一仏の所化は一切仏の化なり。一切仏の化は即ち是れ一仏の所化なり。即ち弥陀經の中に、釈迦極樂の種々の莊嚴を讃歎し、又一切凡夫を勧め、一日七日一心に弥陀の名号を専念すれば定めて往生を得と説く。次下の文にいわく、十方に恒河沙等の諸仏有つて、同じく釈迦能く五濁惡時・惡世界・惡衆生・惡見・惡煩惱・惡邪・無信盛なる時に於いて、弥陀の名号を指讃して、衆生を勧勵して称念すれば必ず往生を得と讃めたまう。即ち其の証なり。又十方仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらんをおそれ、即ち共に同心同時に、各舌相を出して遍ねく三千世界を覆うて誠実の言を説く、汝等衆生皆まさに此の釈迦の所説所讃所証を信ぜべし。一切の凡夫罪福の多少時節の久近を問わず、但能く上は百年を尽し下は一日七日に至つて一心に専ら弥陀の名号を念ずれば定めて往生を得ること必ず疑い無しと。是の故に一仏の所説は即ち一切の仏同じく其の事を証誠したまう。此を人に就いて信を立つと名くるなり。」

はじめに化仏報仏が十方に遍満して光を輝かして來つて、釈迦仏の往生浄土の教を虚妄であると説いても、

一念の疑退の心を生ぜず、決して往生が出来ないということをおそれないというのは、ここに機の深信があるからである。一念疑退の心を起さずというのはその意味である。後に親鸞はこの意味を「たとい地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候……」（歎異鈔）とのべている。報仏化仏の難破も、「自余の行をばげみて仏になりべかりける身が念仏して地獄におちて候はばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候はめ。何れの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、一念疑退の心を生じて恐るる心が更にないという意義を述べたものである。

善導は次に一切の仏は同体の大悲であることをあかし、前仏が殺生等の十悪を衆生をあわれむが故に制せられるのを後仏が出世して十悪をすすめられるということのあり得ないことを述べ、更に阿弥陀経の諸仏の証誠の文を引いて、一仏の証誠は一切仏の証誠である旨をのべている。特に、五濁・惡時・惡世界・惡衆生・惡見・惡煩惱・惡邪・無信盛なる時、弥陀の名号を指證し衆生を勸励したまうことを挙げているのは、二種深信を規として報仏化仏の難破に対する根拠としていることを示すものであろう。

ちなみに、右の報仏化仏の難の文のうち、「諸仏は言行相違したまわず」以下「此れを人に就いて信を立つと名くるなり」までの文は、第四深信の文と共に親鸞は化巻の真門釈のもとに引用されている。恐らくは、先の「自心を建立せよ」とある自心を自利の信心とする時には、十方三世の徳号ではあるけれども「法は頓にして機は漸なり」という意味で、定散自力の信心を捨ててべき意味を機の深信と対比して明かにせられているものであろう。愚禿鈔には、この第七深信の肩註に「自利」と述べられているが、恐らく、機の深信が欠ける時には、助正並べて修する五正行と称名一行との差はあれ、定散自力の諸機各別の信心に墮す意味のあることを述べられているのであろう。

以上、四重の破人の釈を概観したが、最後の報仏化仏の難などは、実に深信が仏智に徹しての決定であることをあらわすものであろう。

「次に行に就いて信を立てるとは、然るに行に二種有り。一つには正行、二つには難行なり。正行と言うは、専ら往生經の行に依つて行ずれば、是を正行と名く。何者か是なるや。一心に専ら此の觀經・弥陀經・無量壽經等を誦誦し、一心に彼の国の二報莊嚴を専注し思想し觀察し憶念す。若し礼するには即ち一心に専ら彼の仏を礼す。若し口に称するには即ち一心に専ら彼の仏を称す。若し讚歎供養するには即ち一心に専ら讚歎供養す。是を名けて正と為す。又此の正の中に復二種有り。一には一心に弥陀の名号を専念して行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是を正定の業と名く。彼の仏願に順ずるが故に。若し礼誦等に依らば即ち名けて助業と為す。此の正助二行を除いて已外は、自余の諸善をば悉く難行と名く。若し前の正助二行を修すれば心常に親近し憶念して断ぜず、名けて無間と為すなり。若し後の難行を修すれば即ち心常に間断す。廻向して生を得べしと雖も衆て疎難之行と名くるなり。故に深心と名く。」

行に就いて信を立てるとは、深信の相を如何にはつきりと行について示すかということであつて、善導はここに五正行をたてている。いわゆる誦誦・觀察・礼拝・称名・讚歎供養の五つである。これを正行として、それ以外の諸善をことごとく難行と名づけるのである。この一段は正行難行の別を立てることによって自らの深信の純不純の相を示すのである。次に、五正行のうち正定業を第四の称名とし自余の四を助業とする。この段は助正並べて修する五正行に対して称名を正定業として立てるのを深信の相として示すのである。ここに五正行をならべての場合は正助を分別せず専ら往生經の行業をまとめて余善と區別しているが、合して正助二行とする時には、称名を正定業として同類の善根たる助行を修する心をもすてるといふ廢立の義を明しているのである。特に「一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是を正定の業と名く。彼の仏願に順ずるが故に」の文は、機の深信に依つてこそ称名のみが彼の仏願に順ずる正定業である意義を鮮明にするのである。法然が何故この文によって廻心したかは、唯この点に立つてのみ理解できるのである。

(1) むすび

以上、善導の七深信をあげてその意義をたずねてみたが、七深信は第一の機の深信を基礎として浄土三經にわたって開展されていることを知った。そして思いがけなくも、親鸞の要門・真門・弘願門という三々法門の基礎が、ここに発していることに導びかれた。

昔から、釈相廃立・釈意隱顯といわれている通り、廃立の義は善導の疏文の上に明かに見ることが出来るのであるが、親鸞の觀經隱顯積のもとである釈家善導の意は何処にみることが出来るのであるか、私には明了でなかった。それが、この深心積に基礎づけられていたとは、実に雲晴れて月を見るような感動を覚えずにはおれなかった。

そもそも、このような問題に何故注意を払わされたかといえば、親鸞の愚禿鈔をみているうちに、善導の深心積をわざわざ七深信と名づけてその一々をならべて注釈されていることに疑問をいだいたからであった。何故なら、二種深信こそ重要な項目と心得ていて、後の五深信は第二深信におさまるといふ説にいつか慣れてしまっていたのであった。何故、親鸞は煩瑣にも七深信六決定などと名づけて註釈をしたのであろうか、ということであった。そして以上述べたような親鸞の信仰体系の基礎となるものがここに見出されたのである。

最後に、古来色々と異論の出た、愚禿鈔における第一深信の註釈「第一の深信は自身を深信する自利の信心なり」という意義にふれてこの小論を終ろうと思う。

異論の一つに、能登の頓成の「自利信心」は自力の信心であるというのがあるが、これは第一深信自体が一切の定散自力の信心を否定する内容であるから、これはあてはまらないのである。恐らく、昔から講録には七深信のうち、あるものは自力あるものは他力と区分けをして説明されて来たものにならずんでおこされた考えであらう。第一の深信が定散自力の心であるなら、あとの深信は意味の通じないものとなるであらう。

次に、愚禿鈔の講録の中には、第一深信だけでは地獄秘事におちいるから自力の信心と註されたのであるという説もあった。親鸞時代に地獄秘事なる法門があったかどうか知る由もないが、そもそも地獄秘事なるもの

は、蓮如上人が「仏法にはあらず、浅間しき外道の法なり」といわれている如く、すでに善導が聖道門の異学・異見・別解・別行の人を群賊惡獸にたとえ、更に定散自力の心すら廃せられているのであるから、地獄秘事を自力の信心と親鸞が名づけよう筈はない。この両論を比較してみると奇しくも、前者は自力の懺悔心をたのむ雑善にまどう心であり、後者は悪を恐れる心である。これらを除いて自利の信心と名づけられるものがあるとなればそれは何であろうか。ここに於いて光るのは先に引用した法然の往生大要鈔の言葉である。

「心を止めて是を案ずるに、始には我身の程を信じ、後には仏の願を信ずる也。但し後の信心を決定せしめん為に、始の信心を挙げるなり」

この始と後とは決して時間的前後ではない。その体は「深信之心」という一心である。一心をあらわす文の前後なのである。

「但し、後の信心を決定せしめんが為に始の信心をあぐるなり。その故は若し始の我身を信ずる様を挙げずして直ちに後の仏の誓ばかりを信すべき旨を出したらましかば、諸の往生を願はん人、雜行を修して本願を馮まざらんをば暫く置く。正しく弥陀の本願の念仏を修しながらも、猶ほ心に若し貪欲瞋恚の煩惱をも具し、身に自ら十惡破戒等の罪業をも犯す事あらば、猥りに自身を怯弱して、返って本願を疑惑しなまし。……」

正しくわが身の悪を恐るる心、すなはち劣等感をすてしめんが為の施設であることを明言されている。実に親鸞の「悪をも恐るべからず、本願をさまたぐる程の惡なき故に」ということに当るのである。仏の知ろしめすところの我が身を信ずる。善惡の自力の機執をすてたところのわが身のほかに如来の救いの手のかかり場所がないとの深信こそ自利信心と名づけられるものであるうか。如来の深信をわが身一つに引き受けて、貪瞋の水火の二河にもおそれることなき金剛の信心こそ「自利信心」と名づけられたものであらう。もしこの「我身」を捨ててなら、かえって如来の本願の生起は空しく失われる外はない。

何分にも多忙のため閑暇を得ず、充分に文をととのえいとまもなく、荒すじばかりをほりおこして述べたために難解な文章になったことを謝して、この小論を終る次第である。